第13回 JINSHA 情報共有会 with C4RA

責任ある研究評価を考える

ー定量的評価指標の現在と未来に向けた課題とはー

2022年3月16日（水），15:30-18:15
Zoom ミーティング

主催: 京都大学学術研究支援室(KURA)
人社フォーラム運営ネットワーク（大阪大学、筑波大学、琉球大学、京都大学、早稲田大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学）
Code for Research Administration (C4RA)

趣旨説明・1

人文・社会科学系研究推進フォーラム幹事校 (JINSHA)
京都大学学術研究支援室(KURA)　佐々木結

責任ある研究評価: 人社　x　C4RA

人文・社会科学系研究推進フォーラム幹事校

人社系の研究にかかわる研究者やURA、事務系職員等が、よりよい研究推進のあり方をともに議論し、ともに行動することを目指して2014 年に発足。毎年フォーラムを持回りで開催し、各大学の人社系担当URA の有志グループが企画・運営に参加。第7回目は、2022年3月7日、中央大学にて開催済み。

大阪大学・筑波大学・京都大学・早稲田大学・琉球大学・北海道大学・横浜国立大学・中央大学・広島大学・東京大学・東北大学・新潟大学・神戸大学

＊ 2022年3月現在、上記の13校が参画

■ 第4回人文・社会科学系研究推進フォーラム（2018.3）
人文・社会科学系研究の未来像を描く－研究の発展につながる評価とは－

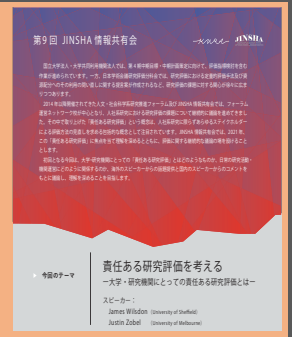
■ 第6回JINSHA情報共有会（2019.7）
研究の発展につながる評価とは～研究評価の未来を洞察する～

■ 第７回JINSHA情報共有会（2019.9)@ RA協議会
研究の発展につながる評価とは―『責任ある研究評価・測定』とURAにできること

■第11回JINSHA情報共有会（2021.5）@INORMS（研究マネジメント国際ネットワーク）
'Responsible Metrics and Multilingualism: A review of evolving Asian perspectives'

■ 第９回JINSHA情報共有会（**2021.2**）

「責任ある研究評価を考える ー大学・研究機関にとっての責任ある研究評価とは」



人社系研究評価の課題：研究成果の多様性、定量評価のベースとなるデータの不足、既存指標との不適合、社会貢献活動やそれと関わる言語の問題など

視野を広げてみると、人社系以外の研究にも**共通する**、さらには日本だけの問題ではない、**より一般的な課題**であることに気づく

責任ある研究評価（RRA）という包括的な概念との出会い

でも、どうやったら日本の大学で実践できる？

RRAという問題意識を共有するC4RAの同僚と合流！

「責任ある研究評価」とは

責任ある研究評価代表的な宣言・報告書

① 研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）(2013年)

ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）の限界を指摘。掲載されている雑誌名ではなく、その論文の科学的内容こそを評価、また、多様な研究成果物の価値とインパクトを評価するよう勧告。

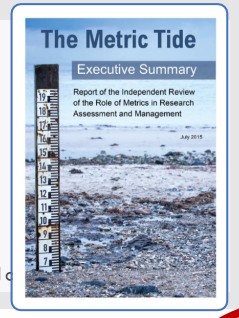
DORA

② ライデン声明(2015年)

定量的評価は定性的評価の支援的利用、英語以外の言語による優れた地域的研究の保護、分野による引用慣行の違いへの配慮など10の原則を提唱。

③ メトリック・タイド（指標の潮流）報告書(2015年)

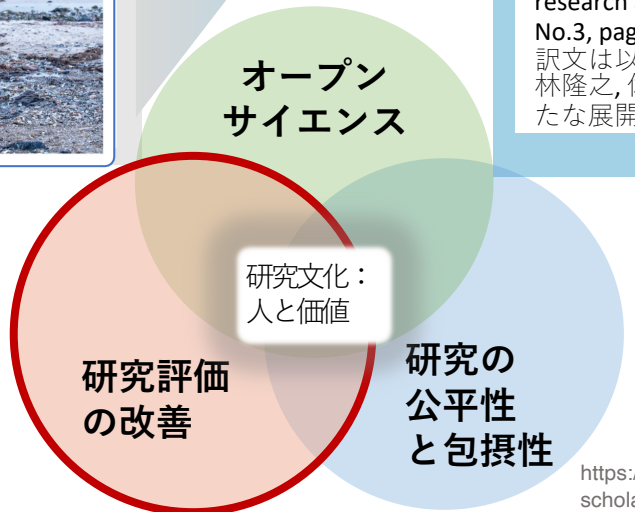
REFへの指標利用の有効性を検討。指標の効用も認めつつそれだけに依存することの危険性を指摘。結論に代えて、頑健性、謙虚さ、透明性など5つの原則からなるResponsible Metricsという概念を提唱。



責任ある研究評価とは、多様で包摂的な研究文化のもとで、複数の異なる特性を有する<u>質の高い研究を促し、把握し、報奨するような評価のアプローチ</u>を指す包括的用語

同様の趣旨で「責任ある研究測定(Responsible Research Metrics)」という用語も。

出所：Stephen Curry et. al. (2020), 'The changing role of funders in responsible research assessment: progress, obstacles and the way ahead' *RoRI Working Paper* No.3, page 7
訳文は以下より。
林隆之, 佐々木結. DORAから「責任ある研究評価」へ：研究評価指標の新たな展開. カレントアウェアネス. 2021, (349), CA2005, p. 12-16



https://sfdora.org/2020/08/18/the-intersections-between-dora-open-scholarship-and-equity/

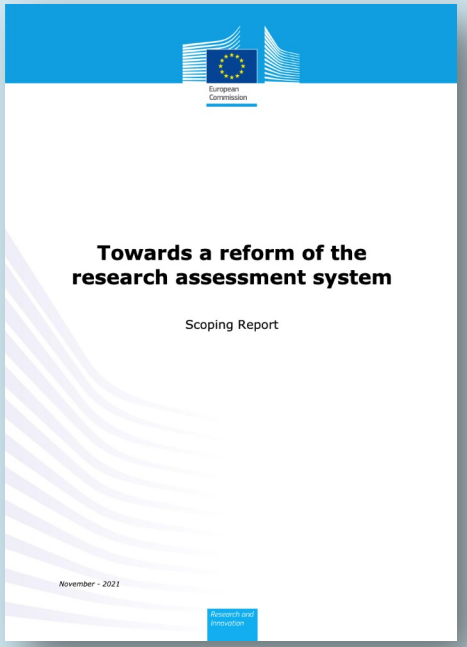
責任ある研究評価　－　最近の動き

欧州を中心に、研究評価改革が加速

研究評価システムの改革に向けて（調査報告書）（2021年11月）

2022年4月までに、研究機関、資金配分機関、各国の評価機関、学会、大学連合など関係機関が署名できる欧州の合意を作成

欧州独自の合意形成により、研究評価改革にかかる連合（Coalition）を作り、具体的な実施計画により、改革をより速く効果的に実現することを目指す。



資金配分機関、民間財団などが議論をリードし、改革を進める

日本でも、

日本学術会議・科学者委員会研究評価分科会提言『学術の振興に寄与する研究評価を目指して～望ましい研究評価に向けた課題と展望～』（2021年11月25日発表）

本提言の目的は二つである。研究評価において定量的評価手法を過度に偏重しないよう求めること、国際的動向を紹介して望ましい研究評価の方向性を示すことである。本提言が、関係省庁及び大学・研究機関を含む全ての関係者に共有され、学術の振興に寄与すべき研究評価の在り方に向けて、改めて検討する契機となるよう期待する。

提言 1　研究評価の**目的に即した評価設計**の必要性
提言 2　研究評価における研究の**多様性の尊重**
提言 3　研究評価手法の基本原則
提言 4　研究評価と資源配分
提言5　**定性的評価の信頼性**の確保
提言6　**科学者コミュニティの責務**

学術会議、国大協などは声を上げるが、実際の行動に結びつきにくいのでは…

議論が熟す一方、大学・研究機関の現実は・・・

- 中期目標・中期計画と連動した評価指標による管理が一層浸透
- SciVal、Incitesなど研究力分析ツールがURAの日常業務でもより一層身近に
- 機関レベルの評価で用いられる評価指標の値を上げるため、同じ指標が学内部局再配分の部局ごとの評価に用いられ、それがさらには、個人の業績評価にも用いられるという、誤ったアライメントが起こっているのではないか
- 評価の目的、指標・データが表すものの意味、各分野の研究の持つ価値を、それぞれ十分に理解し、説明できているだろうか

日本の少し先からの問題提起

メルボルン大学URA

Justin Shearer, Associate Director,
Research Information and Engagement
Research and Collection

オーストラリアは研究が最も高度に指標化された国（Most heavily metricated）大学ごとに独自の研究活動データを集積するシステムを持ち、個人評価のほか教育負荷を決めるのにも利用。メルボルン大学でも非常に優秀なIR部門がデータを駆使し研究評価支援ツールを構築。しかし、研究者のウェルビーイング低下は明らかで、定量的指標中心の評価の限界も。

そこで気づいたのは、（研究力分析にかかる）技術が、それを責任ある形で使う側の我々の能力を超えたということ。分野の特性を理解して、どの指標がその分野でもっとも的確なベンチマークとなりうるのか、という根本的な問いが、技術に追いつかなくなった。このことは、この状況で指標を使うことの問題を浮き彫りにした。

評価・指標へのリテラシーを上げることから、責任ある研究評価の実践へ

そこで、本日のプログラム

15:30～15:40　趣旨説明　「『責任ある研究評価を考えるシリーズ』について」
京都大学学術研究支援室（KURA）URA 佐々木 結

15:40～15:50　趣旨説明　「JINSHA x C4RAで目指したいこと：新たな一歩」
東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室 特任専門員/東京大学 URA 新澤 裕子

15:50～16:00　論点整理　「人社系研究評価をめぐる論点整理」
人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 研究部 准教授 後藤 真

16:00～16:10　話題提供　「InCitesなどを使った業績可視化業務で認識する課題」
京都大学学術研究支援室（KURA）URA 岡﨑 麻紀子

16:10～16:40　話題提供
「J-STAGEとCiNii Booksを活用した人文社会系の研究活動の可視化－実践と課題－」
横浜国立大学 研究推進機構 特任教員（講師）/ URA 久保 琢也

16:40～16:50　＜休憩＞

16:50～17:00　ディスカッション進め方

17:00～17:35　グループディスカッション

17:35～18:10　発表・全体議論

18:10～18:15　閉会

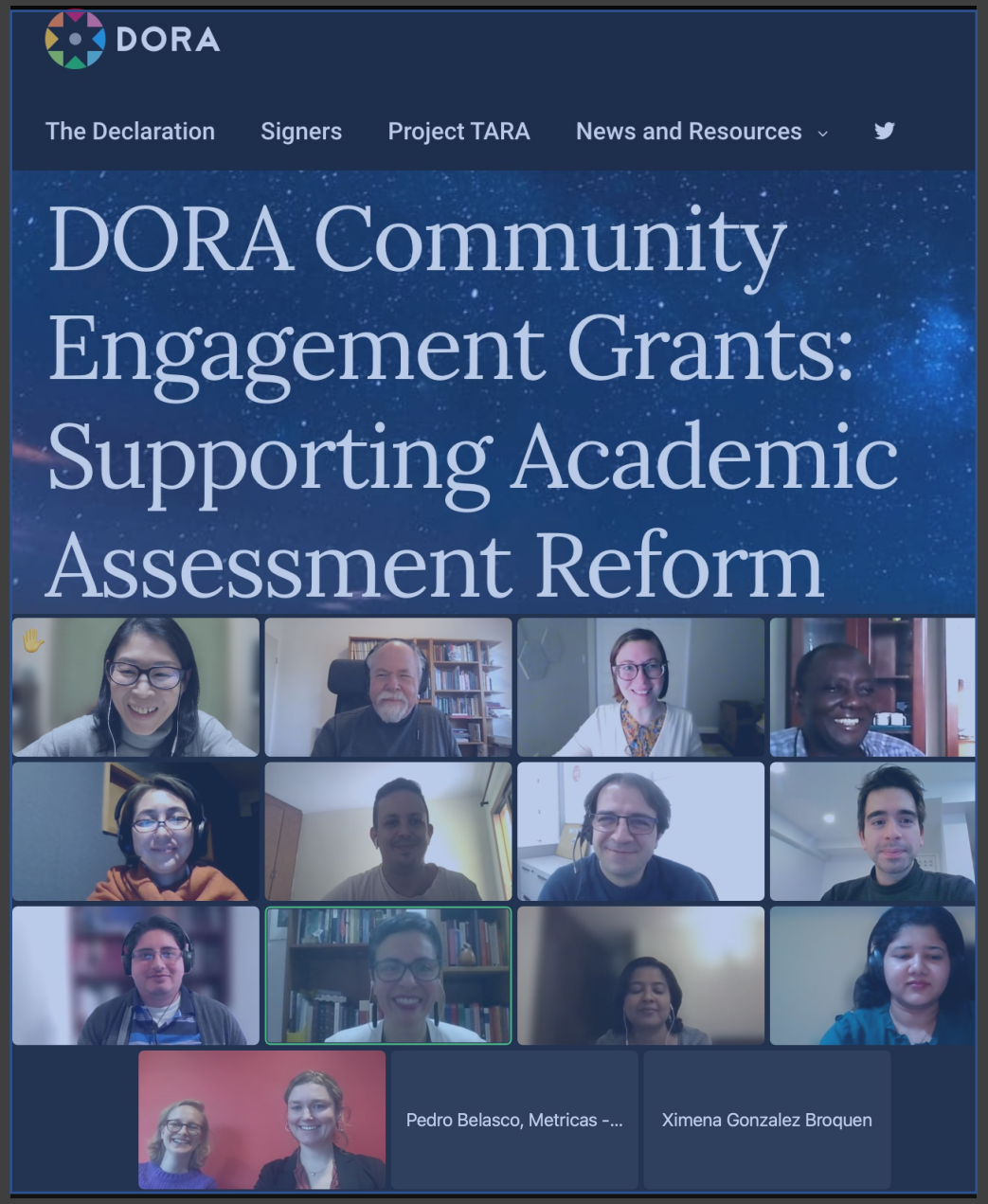
＊今回はチャタムハウスルールを適用します。会議中の発表、ディスカッションで得られた情報は利用可ですが、その**情報の発言者やその他の参加者の身元および所属を明示的にも黙示的にも明らかにしない**ことを承諾いただき、自由なディスカッションができるようご協力をお願いいたします。
＊ざっくばらんなお話ができるよう、「さん」付けでお願いしております。

継続的な議論の場へ
…次回は2022年6月

- JINSHA情報共有会XC4RAで、継続的に議論できる場を創るべく、人文・社会科学系研究推進フォーラム幹事校（JINSHA）でDORA Community Engagement Grantに申請し、無事採択。

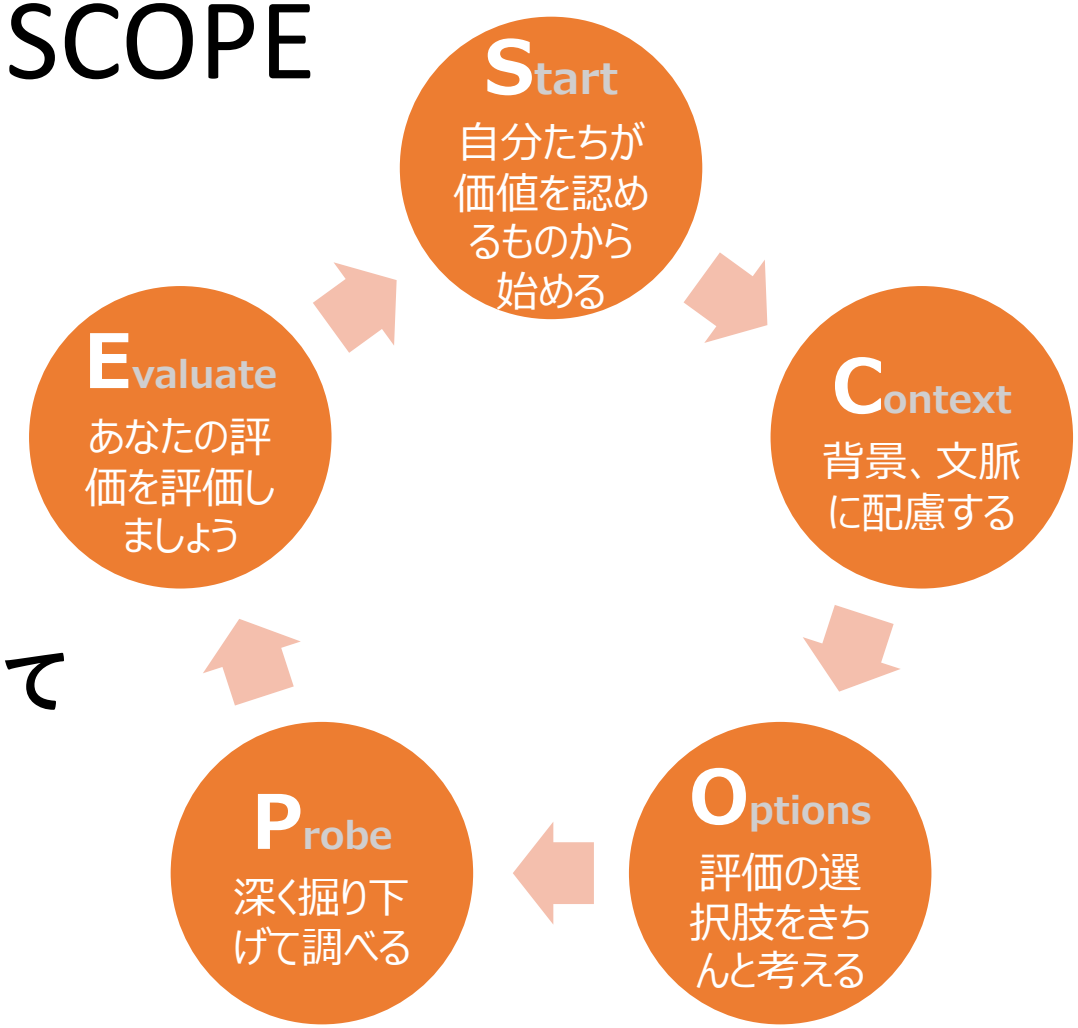
- 次回は、本日の議論をさらに深堀りします。

- 今日は、今後どういう議論や取り組みが必要となるのか、課題や論点を共有する会となれば幸いです。



参考

INORMSの研究評価WG：SCOPE

定量的な指標は

- 常に不完全
- 常に後ろ向き
- より良くするためには・・・
  - ✓**妥当性の確認（あなたが大切にしているものを測っているかどうか）**
  - ✓**指標の「バスケット」の使用**
  - ✓**質的評価との組み合わせ**